

「心のきずなを深める月間」 「人権月間」の取組 第3弾

4年生では、「わたしはさびしさに負けない」というお話でなかまづくりについて学びました。教材から、とも子さんの立ち上がりを学び、一人ひとりが自分や家族をふりかえり、自分の思いをなかまに出していくことの大切さを気づいていきます。

わたしはさびしさに負けない

田中とも子

「とも子ちゃん、きょうもこねね」
「近いの、何でそんなにこねるの」
「また日直のしごとがでたらんよ」
学校にちこくして教室のドアを開けると、
クラスの友だちが、わたしにこう言った。わ
たしは悲しかった。友だちにわけを話そうか
な。でも……。わたしは、家のことを、友だ
ちに話したことはない。

わたしは、お母さんと一人のお兄ちゃんと、
四人でくらしている。わたしが二年生のころ、
お母さんとお父さんが別れたので、四人で八
代にひっこしてきたのだ。それから、お母さ



をもんでいた。

そんな時、わたしはお母さんがかわいそう
で、かたまたまきや、かたまたまをあげた。
わたしはまだ二年生で、きつかったけど、が
まんしてもんだ。

お母さんは、洋服をぬぐ内しよくばかりで
はお金が足りないの、お母さんはたらくよう
になった。お母さんは、レストランで五時半
まではたらくので、わたしは六時までひとり
ぼっちだった。おちやわんがすいじ場におい
てある時は、わたしがあつた。はじめはお
もしろかったけど、だんだんいやになった。
でも、お母さんが、

「ありがとう。とも子ちゃんがあいものを
してくれるけん、とてもたすかるよ」
と言って、よろこんでくれる時は、とてもう
れしくなった。

わたしが四年生になつてから、お母さんは
夜もはたらくに出るようになった。わたしは
びっくりして、
「そんなにはたらいたら、体がくたくたにな
るよ。わたしはおこすかいはいらんけん、
家におつてえ」
と何回も言ったけど、やはりおばちゃんと二
人でスナックを始めた。

夕ごはんを食べたら、お母さんは急いで店
に行く。そして、夜中に帰ってくる。わたし
はいつもねているので、お母さんの帰りは知
らない。そして、夜はたらくようになってか
ら、お母さんは朝起きがにがてになった。お
母さんがおそく起きたときは、わたしも何回
かちこくをしたことがある。お母さんに、
「お母さん、もうちょっと早く起きようよ」
と言うと、

②

①

④

③

「そきやん言うたつちや、おそけん、起き
きらんもん」
と言う。そして、わたしは、
「めんね」

と言うお母さんを見ると、ちよつと言いき
たかなあと思う。お母さんは、朝は本当によ
たりとねていて、きつそうにしている。わた
したちがねている時も、仕事をしているんだ
から、すいみんじかんが足りなくて、おむた
いのはあたりまだだ。

でも、夕ごはんの後、きょうだいである番
したり、勉強やねんじかんをしたりするの
は、やっぱりさびしい。お母さんとおしゃべ
りしたり、いっしょにテレビを見たりした
し、たまにはお母さんのとなりでねていたい
と思う。学校に持っていくもので、ちよ
くせつお母さんに知らせたい。だから、つい

すると、お母さんは、
「そりや、母ちゃんもそきやんしたかばつ
てん、親子四人が食っていくには、夜もは
たらかんといかんけん、あんたは
ば一人前にするのに、母ちゃんもがんばる
けん、あんたもがんばつてね」
とわたしの顔をじつと見つめて言った。

わたしはもうすすすなつたから、お母さん
の分もわたしが早起きをして、ごはんのした
くをしようと思う。また、ちこくして友だち
にいろいろ言われないように、がんばろうと
思っている。



きつと、分かってくれる友だちがいるはずだ。

「ね、お母さん、夜の仕事をめめて、家にお
てよ」



な か よ く し ょ う か た り あ お う ま る い 心 で つ な が ろ う

No.4の2 2023年7月7日(金) 文責:校長:高橋・人権同和教育主任:澤本

2年生では、「ぼくのランドセル」というお話でなかまづくりについて学びました。このお話は、強い者にこびたり、弱い者にいばったりすることは差別であることに気づかせ、自分を大切にすることはもちろん、すべての友だちの人格を尊重していくことの大切さをわからせることを願ったものです。

「おはよう。」
ヒロシは、くつばこの前で、ユウヤに、げんきよくあいさつをしました。
でもユウヤは「おはよう。」とも、いわずに、「おい、ヒロシ、おれのくつもついでに入れとけ。」
と、めいれいするように、いいつけました。
ヒロシは、「いやだよ。自分のくつは、自分で入れてよ。」



「おはよう。」
ユウヤくんは、ぼくよりずっとけんかもつよいし、べんきょうもじょうずだし、いうこと、きいとかんこ、こわいもな。」
と、かんがえて、くつを入れて、やりました。
ヒロシが、きょうしつにはいつて、自分のランドセルを、たなに入れようとする、たの、下に、ランドセルが、おちていました。
「おや、ランドセルが、おちている。だれのだろう。」
ヒロシが、ひろいあけて、ランドセルの、なぶだを、見ると、大きく「ユウヤ」と、かいてありました。
それを、見た、ヒロシは、さつそく「ユウヤくん！これ、きみのだろう。おちてたから、ぼくもってきたよ。」と、ユウヤに、ていねいに、わたしました。



「れ、だろう。」
手に、とつて、うらを、見ると、小さく「トモオ」と、かいてありました。
(な、あんだ、トモオのか。あいつ、おれより、けんかも、よわいし、べんきょうも、へただし...)と、おもいました。
「ようし。」
ヒロシは、トモオの、ランドセルを、ちよんと、けりました。
ランドセルは、ころころと、ころ



がりました。
ちよんと、そのとき、そばを、どおりがかった、トモオは、それを見ていました。



みんな
つながる

